

奪われたヒートソード

ハンターは通常、彼らが所属しているハンターズギルドを通じて依頼を請け負い、こなし、報酬を得る。

だが時折、個人的な接触で依頼をこなす……つまりギルドを通さずに依頼を請け負うこともしばしば行われる。

こういった依頼は大抵、非常に高名なハンターや顔の広いハンターに多い事柄である。

駆け出しの新人、アッシュ・カナンにこのようなケースはかなり珍しいと言つて良い。

「ねえお願いだよ……頼まれてよぉ」

間延びした猫なで声。これが可愛らしい女の子ならば、それこそ可愛げがあるかもしれない。しかしこれが男で、しかも小柄ながらにふくよかな……いや、単刀直入にデブと言つた方が良いだらう……そのような者に言われても、背筋

に悪寒が走ることはあつても愛らしいなどと思うはずもない。

「うつつとうしいなあ。お前もハンターズなら自分で取りに行けよ！」

すがり泣きつく、フォースの格好をしたダルマ……もとい、ニューマンを振り払い、罵声に近い拒絶を示す。

「だつてえ、ボク一人じゃ無理だよ。それに肝心の武器を取られたまんまじゃ、ボク戦えないよぉ」

「フォースだろお前！ テクニックで戦えテクニクで！ 大体、フォースのお前がヒートソードなんか扱えるか！」

ドラゴンに奪われた大切なヒートソードを取り返して欲しい。それがこのデブ……ホプキンスの依頼内容だった。頼まれたハンター、アッシュにしてみれば迷惑この上ない依頼である。

「あのなあ……そういう依頼はギルドを通せよ。そうすりゃ、俺じゃない誰かが引き受けてくれる」

もつともな意見だ。こういう厄介な事柄を解決する為に政府が設けた機関がハンターズギルドなのだ。困っているならばギルドに依頼するのが、たとえそのギルドにフォースとして登録している彼であっても、それが筋というものだ。「ダメだよ。だってギルドなんかは依頼したら、ボクがヒートソードを無くした事、パパにばれちゃうよ！」

はあ、と深く溜息を吐き出しながら、前に倒れ込みそうになる頭を手で押さえる。

迷惑な理由。それはこのホプキンスという二ユーマンの性格にある。

彼は貴族筋の家柄で育った為か、非常に甘ったれた性格をしている。元々彼がフォースとしてギルドに登録したのも、「道楽」や「格好」という甘い考えが基にある。もつとも格好という点に関して言えば、アッシュも人の事を言える立場ではないのだが。

ともかく、ハンターという仕事を道楽の一部としてしか捉えていない彼を、アッシュは清く

思っていない。にもかかわらず、何故かホプキンスはアッシュになつく。ハンターズとしてほぼ同期というのも理由の一つだが、もう一つ理由がある。

「ボクの大切なヒートソード。パパから貰ったヒートソード。とっても大事にしてたのに……お願いだよ、取り返して来てくれよ」

大切に大事にしていたのなら、金庫にでもしまつて持ち出すな。もはやそんな苦言を言う元氣すら、アッシュの中から消え失せていた。

このように情けのない姿をさらすホプキンスがハンターズに所属するフォースとはいえ、危険きわまりないラグオルの森を抜け、ドラゴンの生息する空洞までたどり着いたというのは信じられない事である。そんな彼があと一步というところでヒートソードをドラゴンに飲み込まれ、それでも命からがら逃げ帰ってきたこともまた、信じられない事。そんな間抜けなこと、あるものか？

いや……アッシュは考え直した。

この男ならあり得る。

この男なら、そんな間抜けなことをやってのけるだろう。つまらないことに確信を持ち、それ故にまた溜息も自然と出てしまう。

§ § § § § § § § § § § § § § § §

「それで……結局引き受けたんですか？」

アッシュがなつかれる理由。それは彼の「甘さ」にある。

「しょうがねえだろ……あいつギルドの中でひつついて離れねえんだからよ。それにまあ、依頼に変わりねえし」

基本的に、頼まれたら嫌といえない性格なのだ。相手がホプキンスでなければ素直に受けたところなのだろうが、結局嫌悪するホプキンスでも、頼まれれば断り切れない。それが彼の甘さであり、なつかれる理由。

「あはははは。まーあの汗ダルマにひつつかれたらしょうがないか。私なら蹴飛ばすけどねえ」

アッシュの話聞いていた双子の姉妹。その双子の姉、アナが豪快に笑い飛ばしながらそれでも哀れみ同情する。

「で、なに。アッシュはそんな笑い話を聞かせに来ただけ？」

用件が別にある事を感じながらも、アナはわざとらしくアッシュを聞いたのだした。

「あーいや、それだけじゃなくて……なんだ。相手がドラゴンだし、なんつーかその……」

「つまり、私達にもその依頼を手伝って欲しいと？」

クスクス笑う姉を肘で軽く小突きながら、双子の妹クロエがアッシュの用件を要約する。

「まあ……そういう事だ」

素直に頼むと、しかも女性相手に頭を下げる事が苦手なアッシュ。強情と言うべきなのか、フェミニストと言うべきなのか。どちらにせよ彼もまた難儀なんぎな性格の持ち主なのである。

「いいんじゃない？別に忙しいわけでもないしさ。というより、面白そう！」

快樂主義のアナにとって、面白そうならば何でもありなのだ。ホプキンスが本当にヒートソードを奪われたのならば、その経緯と顛末はネタになるだろう。そして巻き込まれたアッシュの困惑ぶりは見ていて面白い。アナにとってこんな美味しい玩具はそうないだろう。

「まあ依頼としては正当なものですし、ホプキンスさんはあのコレクターとて高名なパガニーニ卿のご子息ですし……」

ようするに、依頼料が期待出来る。クロエはそうふんでいた。彼女は守銭奴ではないが、貧困から腕一つで這い上がってきた経緯がある。それ故に金銭感覚がしっかりしているのだ。もつとも、姉のアナが浪費家である事もクロエの性格を決定づけた要因でもあるのだが。

「で、ドラゴン相手にハンター三人で挑むの？ まあ私とクロエがいれば二人でも十分だけださ」

アナとクロエのウェインズ姉妹。二人の実力は折り紙付きだ。見た目アッシュの方が年上に

見えるのだが、実力は遙かに姉妹の方が上である。幼い頃からたった二人でハンターを生業に生きてきただけの実力はある。故に彼が彼女達を頼るのも道理が通っている。

「いや、一応もう一人加わる」

しかし、アッシュは保険をかけた。ハンターだけ、つまり攻撃主体の者だけでパーティーを組むよりは、援護になる者をもう一人加えた方がより安心だ。そこで彼はフォースを一人用意していた。

いや、アッシュがフォースを一人用意したのは別の理由があつた。

「というより、自分で無くした物くらい、自分で取りに行かねえとなあ」

自己責任を全うさせる。そんな道徳的な理由で依頼者を同伴させるつもりなど、アッシュにはなかった。

「あー、なるほど。それは面白そうだね」

アナはそれを即座に読みとった。面白そうな事に関して、彼女の勘は的確だ。

ユニットも精神力を引き上げる物だろう。そこまで徹底して精神力を上げれば、高レベルのテクニクディスクを使用する事も可能。

つまり、実力と言うよりは装備品による底上げでテクニクを収得しているのだ。なんともおぼつちやまらしい収得方法だ。

「それにしてもなんだ……レアなのはいいが、もうちょっとセンスつてのが……なあ」

小柄な身長と、それに反比例するかの様に横に広がる体積。ピエロを思わせる派手な衣装と、それをさらに滑稽にする小道具と言わんばかりのサングラス。これほどの道化はそうお目にかかれぬが、彼が装備している「レア」と呼ばれる珍しいマグは、彼をより道化にしていた。

「アッシュ君失礼ですよ、そんな事を言っただけで、一応にアッシュをたしなめたクロエだったが、彼女も笑いをこらえるのに必至だった。

パタパタと、小刻みにはためく白い羽。

「天使の羽」と名付けられたレアマグ。愛らしい姿をし、特に女性に人気のあるこのマグも、

ホプキンスを愛らしくする事は出来ず、ただ滑稽にするに止まったようだ。

確かにホプキンスはフォースとして申し分ないテクニクを身に付けていた。故に彼がこの危険な森を抜け、ドラゴンの元までたどり着いたという事に、もはや疑う余地はない。

だが、かといって実力があるとはいえない。少なくとも、ハンターズのメンバーとしてはまだまだ半人前だ。

「ひゃっほーっ！」

「あ、バカ突っ込むな！」

フォースは基本的に、後方支援を得意とする。テクニクはハンターの持つ武器と違い、ある程度距離を置いて発動させる事が可能で、遠距離から効果を発揮させることが出来る。つまり無理して前線に出る必要がないのだ。少なくとも三人もハンターがいる局面では。

「うわあ囲まれたあ！助けてアッシュウー！」

「いっわんこつちやない。あのバカが……」

ヒートソードを無くし、ともに戦える武器を所持していないホプキンス。そんな彼が敵の群れど真ん中に突っ込むなど自殺行為に近い。テクニクで押し切る事も可能かもしれないが、だからといってわざわざ危険を冒すなど考えられない。

というよりは、考えていないのだ。ホプキンスは。

高レベルのテクニクを所持しているとはいえ、その有効的な使用方法を知らない。ハンターという仕事を道楽で始めただけはあり、覚える気がないのだ。つまりは、ハンターとして彼は三流以下。どんなに力を持っても、その使い方を知らなければ無いに等しい。そういう事だ。

「それにしてもクロエ」

「ん？」

なんとか敵を粉碎し、ホプキンスを助け出したアツシュは、あまりの無鉄砲な行動に対し厳しく注意していた。それを見ながら双子の姉は

妹に小声で話しかけた。

「いやさ、あのアツシュが先輩面して説教。それも「勝手に突っ込むな」だってさ。おつかしいよねえ」

「もう……そういう事を言うもんじゃないですよ？」

口から出た言葉とは対照的に、クロエは苦笑していた。

無鉄砲加減なら、アツシュも負けていない。それは彼と一度でも戦場に出た事がある者ならばよく知っている。派手な立ち回りに憧れる彼は、とにかく最前線に立ちたがる癖がある。故に彼はよく勝手に突っ込むのだ。そんな彼が、突っ込むなと激しく注意しているのだから、アナの言う通り可笑しい光景だろう。

「まあアツシュ君にとっては、良い経験になったかもね」

「人の振り見て我が振り直せって？ はは、確かに良い勉強かもねえ」

とは言いつつも、そう簡単に直るものではな

いだろうと、二人とも確信していた。性格というものは、そう簡単に直るほど生やさしいものではないのだから。

§ § § § § § § § § § § § § § § §

ドラゴンは伝説上の生き物であった。少なくとも、アッシュ達の故郷である母星コーラルでは。

しかし彼らが今立つここ惑星ラグオルでは、原生生物として普通に生息している。伝説上の姿や特徴そのままに。

故あってか、ドラゴンを倒す事はハンターズにとつて一つのステータスになりつつある。龍を倒す者、ドラゴンスレイヤーの称号は、強力で希少価値の高い大剣^{ソード}の名になるほど高名な称号で、かつ名誉な称号なのだ。

「今度は勝手に突っ込むなよ。ドラゴンの身体は巨体で、うかつに近づけば踏みつぶされるし、奴が力尽き倒れ込んだ所を押しつぶされる事も

あるんだからな」

すっかり先輩面のアッシュは、ホプキンスを前に講義を始めた。

「わかってるよお。ボクだってドラゴンと戦った事あるんだからさあ」

元々今回の依頼はドラゴンと戦い紛失した、彼のヒートソード奪還が目的。つまりホプキンスは既にドラゴンとの戦闘を経験積みなのだ。その為か、いやその為と言うよりは、厚かましいほどに先輩面するアッシュに嫌気が差し始めたのだろう。元々おぼっちゃまで甘ったれた性格をしたホプキンスが、上からあれこれ指図されるのを清く思うはずもない。

「ダメよお、ホプキンスくうん。ちゃあんと、セ・ン・パ・イ、の言うことは聞かないとねえ」

わざとらしく、お姉様ぶった甘い口調で、アナはアッシュの肩に手をかけ少し寄りかかるように、そして空いた片手の人差し指を左右に振りながら、ずいと顔を前に突きつけるように語

り始めた。

「あなたはドラゴンと戦ってまだ勝ってないでしょ？でもねえ、このアッシュ先輩はなあ〜んと、ドラゴンに勝った事があるのよーっ！」

両手を大きく上に広げ、オーバーなほどに驚いてみせる。もちろんこのようなりアクションに説得力など有るはずもなく、アッシュはむしろ不快に感じた。

「何が言いたいんだよ、アナ」

あのアナが、ただアッシュを褒めるなどあり得ない。その裏を、アナはすぐに暴露し始めた。

「つまり、経験者の言葉は重要よってこーと。ドラゴンに斬りかかろうとしたら、ひざまずいたドラゴンのお尻にぶちって潰された、なあ〜んて経験者、そういうないもんねえ」

そう。実はアッシュもドラゴンとの戦闘を経験した者だった。ただし彼の場合、同行していた凄腕の老兵がほとんど一人で片を付けた為、それを見守っていただけだったのだが。しかし無鉄砲の彼が大人しくしているはずもなく、不

用心に突っ込んだ所でドラゴンに手痛い仕打ちを受けている。アナはその事を語っているのだ。

「……行くぞ！」

事実だけに、返す言葉もない。出来るのは、顔を赤らめふて腐れ、わざと肩で風を切るようにテレポーターへと向かう事だけだった。

彼の背中では、腹を抱え笑い転げるアナの声が響いていた。

アッシュを笑い者にするだけの實力は、アナにはあった。そして彼女の妹もまた、相当の實力を持つ者だった。

二人でも倒せる。アナはアッシュにそう語った。それを今まさに実践している。

「ハッ！」

ズサッ！ズサッ！

両手に持つ短剣が、左右交互に光の尾を作る。その軌道上にはドラゴンの脚。

痛みに耐えかねてか、巨大なるものは地響きを鳴らし、足下の小さな生き物を踏みつぶそう

とする。その動向を見極め、足下を離れては近づき、小さな刃物で傷を付けては離れる。

「ヤッ！」

足下の小さき者を助けるべく、よく似たもう一人の小さき者は投^{スライサー}剣の刃を遠方から投げつける。それはただ巨大なるものを傷つける為だけではなく、注意を自分に向ける為でもある。

ピタリと、足を止め狙いを定めるように首を上げる巨大なるもの。その行為を見、警戒を促^{つな}す小さき者。

「来た！アッシュ君、ホプキンスさん、避けて！」

名を呼ばれた二人にも解っていた。巨大なるもの、ドラゴンが何をしようとしているのかを。

ゴオオオオオオッ！

唸るような音と共に、ドラゴンの口からハンターズ目掛け炎が吹き出された。その口はさながら、火山の「火口」のよう。

「ひやあ！」

炎の届かぬ遠方へ。ホプキンスは悲鳴を上げ

ながら何とか逃げ切った。

「チャンス！」

一方アッシュは炎を避けつつ、ドラゴンの脇へと滑り込む。足を止めたドラゴンは、今格好の的。すでにアナはこの機会を逃すことなく、何度も短剣^{ダガー}で脚を切り刻んでいる。

だが、アッシュは躊躇^{ちゅうちょ}躊躇した。

もしやまた、ドラゴンの下敷きになりかけるのではないか？

いや、そうではない。アッシュは躊躇したわけではないのだ。

ズン！

程なくして、ドラゴンはひざまずくように脚を折り前のめりに倒れ込んだ。

もしアッシュがすぐに駆け寄ったのなら、おそらく巻き込まれただろう。

見ていたのだ。ドラゴンの動向を。

状況を把握しろ。あの時、初めてドラゴンと対峙した時。老兵に戒め^{いまし}られた言葉。悔しかったあの思い。それを忘れてはいなかった。

「アツシュ、頭！」

「解ってる！」

「ダブルセイバー 剣を手に、既にかけ出していたアツシュは呼びかけに答えた。」

「さーて、どうやって取り出す？」

倒れ込み、口から息も炎も漏れる事の無くなつたドラゴンを前に、四人は次の課題に悩ませていた。

「飲み込まれたのは間違いないんだよな？」

「そうだよお。こいつがボクの大事なヒートソードを飲み込んだんだよお」

巨大なドラゴンがヒートソードを飲み込んだ。それ自体は別に疑うつもりはない。これだけの巨体ならば、それも可能であろうから。

問題は、飲み込んだとして……どうやって腹の中からヒートソードを取り出すか？という事なのだ。

「腹かつさばいて取り出すか？」

というアツシュの意見が、おそらく直接的で

一番的確な答えだろう。しかし……。

「どうやって？」

という問題が残る。

「ちよつと……大きすぎますよね。それに、何というか……」

これだけ大きなドラゴンの腹を切り開く。その結果どうなるか？それは安易に想像がつく。故にあまりお目にかかりたくない光景だ。

「と言っても……他に手はないだろ？」

考えれば答えはあるかもしれない。が、これ以上の策を思いつかない。というより考えるのが面倒なだけかもしれない。

「なら、言い出したアツシュが責任取ってよね」

「え？」

同じく、あまり考えるのを得意としないアナが、アツシュの肩を叩き実行するよう促した。うなが

「だって、この依頼はアツシュが引き受けた依頼でしょ？なら責任取って自分でやる！」

言いながら、想像される光景を目の当たりにしないよう、場を離れようとする。

「ちよつ、ちよつと待ってよ。いくらなんでもそれは……」

「では、よろしくねアツシュ君」

「つて、クロエまでっ！」

「ボク達は向こうで待ってるからあ」

「ちよつと待てホプキンス！てめえの 剣^{ヒートソード}だろうが、残れっ！」

そそくさと立ち去る三人に向けられた悲鳴と罵声が、空洞に虚しく木霊した。

§ § § § § § § § § § § § § § § §

「アツシュ、まだ臭うよ……」

ギルド内のロビー。 ^{汚れ役のアツシュ} 貴い犠牲の元無事取り戻したヒートソードを囲み、四人は依頼完了を確認していた。

「うるさいなあ……あいつ、ちよつど食事の後だったみてえでさ。血だけならまだしも……うえ、思い出しただけで……」

眉をひそめ、口に手を当てながら思い出した

くない光景を頭から追い出そうと必至だった。

「それにしても……」

そんなアツシュを助ける為、というよりは、自分もその光景を思い描きたくないだけかもしれないが、奪還したヒートソードを手に取りながらクロエが話題を代えた。

「さすがはパガニーニ卿がコレクトしていたヒートソードですね、これ」

ソードとは、その名の通り剣の事なのだが、彼女らの言うソードは少し意味が違う。

ハンター達が使う武器にはいくつか種類があるが、ソードは大剣と呼ばれる大振りの剣を指す。しかもそんな大振りの剣でも、最も扱いやすいが最も威力の弱い初心者用の大剣の事を言うのだ。

だが、いくら初心者用とはいえ、大剣はその大きさ故に扱いが難しい。持っただけでも困難であり、専門的な技術を身に付けないと敵に当てるどころか振り回す事もかなわないだろう。

そんな大剣を、なぜフォースである、つまり

専門技術を持たないホプキンスが武器として持ち歩いていたのか？その答えは、彼が扱っていたヒートソードそのものにあった。

「えらく軽いですね。おそらく命中修正が極限まで高いようですが？」

「うん。しかもネイティブとアルタードの属性値も最高なんだっ！」

ハンターが扱う武器は、刃にフォトンという特殊な技術を用いている。このフォトンは非常に不安定で、制作時に意図して付加価値を付ける事が難しいのだ。それ故に、偶然の産物といえる付加価値が付く物は高額で取引されるほど貴重^{レア}なのだ。

ホプキンスのヒートソードは、その付加価値がえらく高い。つまりパガニーニがコレクションの一つに加えていた事が納得出来るほど極めて珍しい品なのである。

「でもやっぱり、ボクにソードは難しいよなあ……そうだ！今度はスライサーをおねだりしよう！クロエさんの、あれ格好良かったもんなあ」

今回の一件、彼にとって反省すべき点は「ソードは難しいから次はスライサー」という、あまりに子供じみた事だけだったようだ。もっと他にも反省すべき点は沢山あると思うが、それを口にする気力は、アッシュには無かった。

「さて……まあこれで依頼は完了だな」

依頼の完了を確認する。それはつまり、依頼料の請求を意味する。

「ありがとうね、アッシュ。じゃこれ、今回のお礼」

ポンと、テーブルの上にホプキンスが置いた依頼料。それを三人は信じられないという面持ちで眺めた。

「これだけ？」

有数のコレクターであるパガニーニ。その御曹司であるホプキンス。その彼が支払う依頼料なのだから、当然高額を期待した。むろん期待するだけなら勝手であり、期待通りの依頼料でなかったとしても、腹を立てる筋合いはない。

しかしその額が、ギルドに支払われる妥当な

金額よりも遙かに下回れば、疑いたくもなるだろう。

「300メセタ？お前なあ、ふざけるのもいいかげんにしろよっ！」

「だってえ、友達なんだから気持ち分でいいじゃないかあ……ボク、今持ち合わせ少ないし」

誰が友達だ？そう突っかかるうとしたアツシユよりも、早く口を開き行動に出た者がいた。

「ホプキンスさん？いくらギルドを通してない非公式な依頼とはいえ、この額はあまりにも酷すぎませんか？」

クロエである。

「えーっ、でも友達だしさあ……」

ぐちぐちと口ごもりながらも言い訳をするホプキンス。その様子に苛立ったのか、クロエはダンッと机を叩き立ち上がった。

アツシユは呆然と見守る事しかできなかったが、クロエをよく知る姉は、始まったとクスクス笑いながら様子を見ていた。

「解りました。ギルドを通さずきちんと契約を

しなかった私にも落ち度がありますから。その300メセタとこのヒートソードだけで納得するとしましょう」

まだ手にしていたヒートソードと共に、クロエは立ち去るそぶりを見せた。

「ちよっ、待ってよ。それはボクのヒートソードだよお！だいたい、ちゃんとそれをボクに返さないで依頼の終了にならないじゃないかあ」

「そうですか？依頼はあなたがアツシユ君にドラゴンからヒートソードを取り戻してほしいという依頼でしたよね？ですからちゃんとアツシユ君はドラゴンから取り戻しました。よって依頼は完了しています。違いますか？」

もちろん屁理屈である。このような解釈、通ずるはずはない。もしギルドを通した依頼ならば。

「ご不満なら、お父様がギルドを通して抗議してください」

出来るはずがない。ホプキンスがギルドを通さずにアツシユを頼ったのは、父パガニーニに

この事を知られたくないらなのだから。

「酷いよお……返してよお、ボクのヒートソー
ドお」

まるでいじめっ子といじめられっ子。低レベルな争いに、乾いた笑い声しか上げる事の出来ないアツシュ。その乾き、低レベルな争いというだけではないのだが。

「クロエ……こええな」

「でしょ？まあ少なくともお金絡みで怒らせない方が良いわよ」

クロエは守銭奴ではない。だが、貧しかったが故に理不尽な金銭は彼女の逆鱗となつていく。ドラゴン逆鱗の方がまだましだったかも知れないと、後にホプキンスはそう後悔する事になる。

余談だが、結局の所ホプキンスはヒートソー
ドを4万5千メセタで買い取る羽目になったとの事だ。一人頭1万5千メセタ。ハッキリ言つてギルドを通してこんな高額な依頼料はそうないだろう。